本庄市埋蔵文化財調査報告書　第22集

北堀新田遺跡

－ 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

2010

本庄市教育委員会

本庄市埋蔵文化財調査報告書　第22集

北堀新田遺跡

二〇一〇　本庄市教育委員会

北堀新田遺跡

－ 集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 －

２０１０

本庄市教育委員会

序

本庄市はかつて中山道一の繁栄を誇った宿場町として、また、国学者塙保己一生誕の地として広く知られるところです。そうした歴史的な背景と文化的風土を持つ本庄市は、また多くの埋蔵文化財にも恵まれ、市内には旧石器時代から近代に至るまでのさまざまな遺跡が分布しています。

本書は本庄市北堀に所在する北堀新田遺跡の発掘調査成果を記録したものです。この北堀新田遺跡の周辺部では、近年、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査の進行によって、北堀久下塚北遺跡、久下東遺跡、久下前遺跡など、古墳時代から奈良・安時代にかけての大規模な集落跡の存在が明らかになりつつあり、市民をはじめ各方面の注目を集めているところです。北堀新田遺跡はこれら遺跡群の東に隣接する位置にあたり、一連の集落跡の東端部を占める重要な位置に所在しています。今回の調査では、奈良・平安時代の住居跡３棟が発見されるとともに、数多くの遺物が出土し、この地域の生活史を語るうえで、さらに新たな資料を加えることできました。

このような貴重な文化遺産を長く後世に伝えていくことは、現代に生きるわたくしたちに与えられた責務であり、地域の歴史を明らかにすることは、わたくしたちがよりよい未来を築くための手掛かりとなるものです。今後は本書が学術研究の発展に寄与するとともに、生涯学習の場に広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、文化財保護に対する深いご理解を賜りました狩野美代治氏、調査に際してご指導、ご協力を頂きました方々、直接作業の労にあたられた皆様に、衷心よりの感謝を申し上げます。

平成 22 年 3 月

本庄市教育委員会

教育長　茂　木　孝　彦

例　言

1．本書は埼玉県本庄市北堀字新田 1546－1 に所在する北堀新田遺跡の発掘調査の報告書である。

2．調査は狩野美代治氏が計画する集合住宅建設にともない、事前の記録保存を目的として本庄市教育委員会が実施したものである。

3．発掘調査は北堀新田遺跡の 249.4 ㎡を対象として実施した。

4．発掘調査期間は以下のとおりである。

　自　平成 21 年 4 月 8 日

　至　平成 21 年 4 月 28 日

5．発掘調査担当者は以下のとおりである。

　本庄市教育委員会文化財保護課　太田博之

　　同　　大熊季広

6．発掘調査に関する基準点測量及び遺構実測は株式会社測研に委託した。

7．整理調査期間は以下のとおりである。

　自　平成 21 年 6 月 29 日

　至　平成 22 年 3 月 12 日

8．整理調査担当者は以下のとおりである。

　本庄市教育委員会文化財保護課　太田博之

　　同　　大熊季広

9．整理調査作業は株式会社東京航業研究所に委託し、佐々木藤雄が担当した。

10．本書の執筆はⅠ・Ⅱ・Ⅲを本庄市教育委員会文化財保護課が、Ⅳ・Ⅴを佐々木藤雄が担当した。

11．本書の編集は本庄市教育委員会文化財保護課の指導にもとづき、佐々木藤雄が担当した。

12．本書に掲載した出土遺物、遺構および遺物の実測図ならびに写真、その他本報告に関係する資料は本庄市教育委員会において保管している。

13．発掘調査から整理調査、報告書の刊行に至るまで、以下の方々から貴重な御助言、御指導、御協力を賜りました。ご芳名を記し感謝申し上げます。（順不同・敬称略）

田村　誠　金子彰男　中沢良一　外尾常人　丸山　修　今井千恵　大橋正子　斉藤弘道

嶋本慶子　関根唯充　村山　修　村山彩子　山本典幸

14．北堀新田遺跡の発掘調査、整理調査及び報告書刊行にかかる本庄市教育委員会の組織は以下のとおりである。

・平成 22 年度

教　　育　　長　茂木孝彦

＜本庄市教育委員会事務局＞

事　務　局　長　腰塚　修

文化財保護課

課　　長　儘田英夫

課　長　補　佐　鈴木徳雄

埋蔵文化財係

係　　長　太田博之

　　恵河内昭彦

　　大熊季広

　　松本　完

　　松沢浩一

　　的野善行

凡　　例

1．本書所収の各遺構図における方位針は座標北をさす。

2．本調査における遺構名称は下記の記号を使用した。ただし本文中においては、「第○号住居跡」と表記した。

SI…竪穴住居跡　SD…溝状遺構　SK…土坑　P…ピット

3．本書に掲載の遺構図ならびに遺物実測図の縮尺は以下を原則とし、各挿図中にはスケールを付してある。

【遺構図】

遺構全測図…1／120　竪穴住居跡…1／60、1／30　溝状遺構…1／120、1／60

土坑…1／60

【遺物実測図】

土器…1／4　石製品…1／4　鉄製品…1／2

4．遺構断面図の水準数値は海抜を示す。単位はmである。

5．遺構断面図中の斜線は地山を示す。

6．本調査における遺構の土層断面図及び遺物観察表に示した色調は『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局）を使用して観察した。

7．遺構の規模は上端での計測値を原則としている。

8．遺物観察表中の単位は、法量はcm、重さはgである。（　）内の数値は推定値、＜　＞内の数値は残存値を示す。

9．本書掲載の位置図は本庄市都市計画図1／2,500に加筆したものを用いた。

目　次

序文
例言
凡例
目次
Ⅰ　調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1
Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2
Ⅲ　調査の方法と経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　1　調査の方法 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
　2　調査の経過 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 5
Ⅳ　遺構と遺物 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　1　竪穴住居跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
　2　溝状遺構 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 13
　3　土坑 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 15
　4　ピット ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18
Ⅴ　まとめ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 19
引用・参考文献 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 20
写真図版
報告書抄録

挿図目次

第1図　周辺の遺跡 ・・・・・・・・・・ 4
第2図　北堀新田遺跡の位置 ・・・・・・ 5
第3図　調査区全体図 ・・・・・・・・・ 6
第4図　第1号住居跡 ・・・・・・・・・ 7
第5図　第1号住居跡出土遺物 ・・・・・ 8
第6図　第2号住居跡 ・・・・・・・・・ 10
第7図　第2号住居跡出土遺物 ・・・・・ 11
第8図　第3号住居跡 ・・・・・・・・・ 12
第9図　第3号住居跡出土遺物 ・・・・・ 13
第10図　第1・2号溝 ・・・・・・・・・ 14
第11図　第1号溝出土遺物 ・・・・・・・ 15
第12図　第1・2・3号土坑 ・・・・・・ 15
第13図　第1号土坑出土遺物 ・・・・・・ 16
第14図　第4・6号土坑 ・・・・・・・・ 17
第15図　第7号土坑出土遺物 ・・・・・・ 17
第16図　第8・9号土坑 ・・・・・・・・ 18
第17図　ピット出土遺物 ・・・・・・・・ 18

表 目 次

第1表　第1号住居跡出土遺物観察表 ………………………… 8
第2表　第2号住居跡出土遺物観察表 ………………………… 10
第3表　第3号住居跡出土遺物観察表 ………………………… 12
第4表　第1号溝出土遺物観察表 ………………………… 15
第5表　第1号土坑出土遺物観察表 ………………………… 16
第6表　第7号土坑出土遺物観察表 ………………………… 17
第7表　ピット出土遺物観察表 ………………………… 18

図版目次

図版1　調査区全景（西より）
調査区全景（南西より）
図版2　第1号住居跡（西より）
第1号住居跡遺物出土状況（東より）
第1号住居跡カマド（西より）
第2号住居跡（西より）
第2号住居跡カマド（西より）
図版3　第3号住居跡（南より）
第3号住居跡カマド（南より）
第1号溝土層断面（西より）
第1・2号溝（東より）
第1・2号溝土層断面（東より）
図版4　第1号溝（東より）
第1号土坑（東より）
第2号土坑（南より）
第3号土坑（北西より）
第4号土坑（西より）
図版5　第6号土坑（南東より）
第7号土坑（北西より）
第8号土坑（南より）
第9号土坑（西より）
調査区北東部ピット群（北西より）
調査区南西部ピット群（南西より）
作業風景（1）
作業風景（2）
図版6　第1号住居跡出土遺物
第2号住居跡出土遺物
図版7　第3号住居跡出土遺物
第1号溝出土遺物
第1号土坑出土遺物
第7号土坑出土遺物
ピット出土遺物

Ⅰ　調査に至る経緯

平成21年1月22日、狩野美代治氏から、本庄市北堀１５４６番地１の土地516㎡に、集合住宅の建設に伴う開発の計画があり、この土地にかかる『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の照会が本庄市教育委員会あて提出された。本庄市教育委員会において、埼玉県教育委員会発行の『本庄市遺跡分布地図』をもとに、同地の埋蔵文化財の状況を調査したところ、当該計画予定地の一部には、周知の埋蔵文化財包蔵地の北堀新田遺跡（53-062）が所在することが判明した。

この北堀新田遺跡の周辺部では、本庄早稲田駅周辺土地区画整理事業に伴う発掘調査によって、北堀久下塚北遺跡、久下東遺跡、久下前遺跡、北堀新田前遺跡など、古墳時代から奈良・安時代の集落跡が東西に連なるように存在し、大規模な遺跡群を形成していることが明らかになりつつあったが、これら遺跡群の東方に隣接する北堀新田遺跡についても、当該遺跡群の一角を占める遺跡であることが予想された。とくに、北堀新田遺跡の東端部では、これまでの試掘調査により、遺構の広がらない範囲の存することが判明しており、連続する住居跡群の東端を画する位置にあり、一連の集落跡の範囲を確定するうえで重要な遺跡となることが予想された。また、南に隣接する北堀新田前遺跡では古墳時代前期の方形周溝墓群が検出されており、北堀新田遺跡の範囲にも同様の遺構が展開している可能性も考えられた。

本庄市教育委員会では、以上の状況を踏まえ、平成21年2月24日、当該事業予定地について、埋蔵文化財包蔵地の範囲確認調査を実施した。その結果、調査の範囲において、現地表より40～45㎝の深さで、竪穴住居跡や土坑、溝等の遺構が重複して検出され、竪穴住居跡の確認面周辺では、奈良・平安時代の土師器片などの遺物が出土した。また、遺構の分布が、従来の周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲をこえて、事業予定地全面に広がっていることも確認された。

本庄市教育委員会では、この結果を受け、平成21年2月24日付け本教文保発第240号で、狩野美代治氏あて『埋蔵文化財の所在及び取扱いについて』の回答を送付し、

1．協議のあった土地については周知の埋蔵文化財包蔵地北堀新田遺跡（53-062）が所在することから現状保存が望ましいこと、

2．やむを得ず現状変更を実施する場合は、文化財保護法第93条の規定に基づき、埼玉県教育委員会あて埋蔵文化財発掘の届出を提出するとともに、埼玉県教育委員会の指示に従い、埋蔵文化財の保存に万全を期すこと、

3．埋蔵文化財発掘の届出にあたっては、当教育委員会と別途協議を行うこと

の旨を伝達した。

しかし、その後の協議の結果、他に適地が得られないことから、やむをえず集合住宅の建物部分249㎡ついて、記録保存のための発掘調査を実施し、他の範囲については盛土保存等で対応し現状保存することとなった。

現地における記録保存のための発掘調査は、平成21年4月8日付けで、埼玉県教育委員会あて遺跡台帳および遺物分布地図の変更・増補の通知を行ったのち、本庄市教育委員会が調査主体となり、平成21年4月8日から平成21年4月24日までの期間に実施した。

（本庄市教育委員会）

Ⅱ　遺跡の立地と歴史的環境

本庄市は埼玉県のほぼ北端に位置し、市域の北縁に流れる利根川から南端の上武山地まで南北に長い約 90k ㎡の範囲である。地形は利根川沿いの低地帯、市役所や JR 本庄駅が立地する本庄台地、旧児玉町の主要部分から南に広がる丘陵地帯、更に小山川を遡れば市内最高所の陣見山に達する。

本庄台地の中央付近に上越新幹線本庄早稲田駅が平成 16 年に開業し、駅周辺の土地区画整理事業に伴う記録保存のための発掘調査が現在行われており、本書で報告する北堀新田は、駅の北方約 500 m に位置している。

遺跡周辺の地形は、東流する男堀川と女堀川に挟まれた幅約 700 m の低地帯と、低地帯の中央を河川と平行に延びる微高地とによって構成され、周辺の集落遺跡はいずれも微高地上に立地している。ここでは男堀川・女堀川下流域で調査・報告がなされた主要な遺跡のうち、古墳時代～中世に属するものを中心に略述する。

弥生時代後期に、やや数を増しながら大久保山丘陵等の残丘周辺に進出した集落は、古墳時代前期に入ると、周囲の台地面に大きく展開する。その中でも、とくに集中度の高い地点が、現在の関越自動車道本庄・児玉インターチェンジ付近の下浅見・高関周辺地域を中心とした、直径約 1 km の範囲である。後張遺跡（22）、川越田遺跡（23）、東牧西分遺跡（26）、浅見境北遺跡（28）、雷電下遺跡（30）、今井条里遺跡（19）、地神・塔頭遺跡（18）等で該期の遺構が検出され、特に竪穴住居跡 35 軒が確認された後張遺跡（22）はそのなかでも中心的な集落であろう。これらの遺跡群よりも東方に位置する北堀新田遺跡周辺の微高地上においては、現時点で確認された該期の遺構数はさほど多くはないが、久下東遺跡（2）、久下前遺跡（3）、西富田・四方田条里遺跡（15）、四方田遺跡（21）、下田遺跡（35）、七色塚遺跡（36）等で前期の住居跡などが検出されており、今後この微高地上においてもからも、さらに多くの遺構が検出される可能性は高い。さらに、数的には少ないながら、小山川に近い村後遺跡（48）、古川端遺跡（54）や、女堀川左岸の本庄台地奥部に占地する社具路遺跡（11）等でも住居跡などが検出されている。

注目すべき点として、川越田遺跡（23）などのように叩き調整の甕やパレススタイル壺を出土する遺跡が複数見られる。また、遺構としては今井条里遺跡（19）で水田跡が検出されることなどから、外来の新たな情報を受け入れていた様子が読み取れる。

古墳時代中期になると遺跡の数は倍増する。前期集落の中心であった下浅見・高関周辺地域でも、遺構数はさらに増加し、未調査範囲も含めれば後張遺跡（22）だけでも 100 軒近くの竪穴住居跡が存在したと推定される。また、反田遺跡（17）、梅沢遺跡（25）、飯玉東遺跡（29）、根田遺跡（31）、山根遺跡（32）なども新たに形成された当該期の集落遺跡である。さらに、女堀川左岸の西富田地域にも大規模集落の展開が確認されている。この地域は、社具路遺跡（11）において数軒の前期竪穴住居跡が見られた以外は、集落としての利用はほとんど無かったと考えられており、中期において実行された大規模な開発に伴って進出を果たした集落群と考えられている。二本松遺跡（4）・夏目遺跡（8）・夏目西遺跡（7）、薬師元屋舗遺跡（10）、社具路遺跡（11）、笠ヶ谷戸遺跡（12）、雌濠遺跡（13）等いずれも遺構密集度の高い遺跡である。

これに対し、前期の遺構が検出された女堀川西側の地神・塔頭遺跡（18）、今井条里遺跡（19）で

は中期の遺構が存在しない。また、散漫ながらも前期の遺構が確認された大久保山丘陵東側では、中期においても東谷遺跡（45）、村後遺跡（48）、東本庄遺跡（51）、西五十子古墳群（52）、古川端遺跡（54）などが認められる。ただし、遺跡群の規模としては、前期同様大きなものではない。

なお、中期の集落においても外来系の要素は目に付く。この一帯は、学史的に著名な二本松遺跡（4）をはじめ、東日本でもいち早くカマドを受容し地域として知られているが、布留式系の甕が二本松遺跡（4）・夏目遺跡（8）・夏目西遺跡（7）等で出土していることなどからも推測されるように、集落遺跡の急増の背景には、他地域からの移住があった可能性も指摘できる。

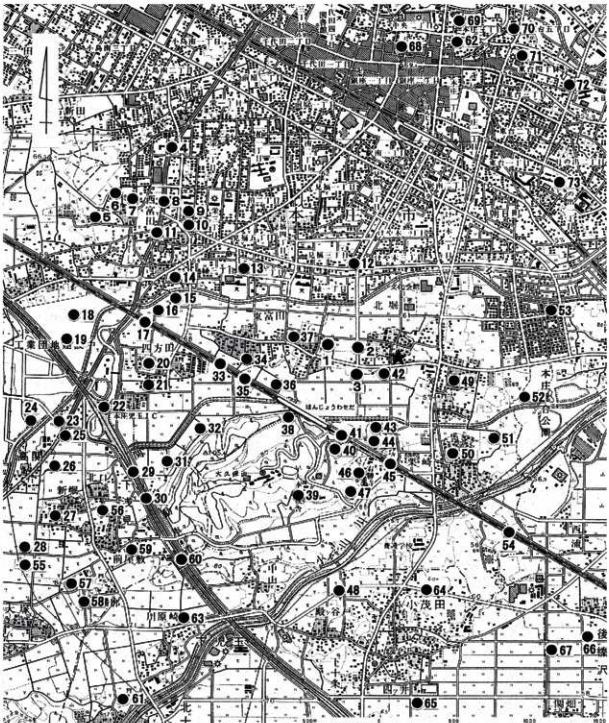
古墳時代後期に入ると、遺構数はさらにいっそうに増加する。中期までは小規模な集落のみであった大久保山東側の栗崎地域においても、東谷遺跡（45）・村後遺跡（48）・東本庄遺跡（51）等で、集落規模の拡大傾向が認められるようになる。後期において注目すべきは、女堀川左岸に展開する遺跡群の動向で、中期にわずか数軒であった住居が後期には300軒を超える今井川越田遺跡（24）と、100軒を大きく超えると思われる社具路遺跡（11）・薬師元屋舗遺跡（10）の発達である。前者は対岸の後張遺跡（22）・四方田遺跡（21）等からの移動、後者は中期に100軒近くの竪穴住居を擁した雌濠遺跡（13）・笠ヶ谷戸遺跡（12）からのムラ全体の合流が考えられる。いずれも用水路や水田の管理・経営形態の変革を背景とした集落再編の結果であろう。

古墳時代の墓域としては、まず前期段階において、大久保山周辺に、方形周溝墓・古墳が出現する。方形周溝墓は飯玉東遺跡（29）、浅見山Ⅰ遺跡（38）、北堀新田前遺跡（42）、村後遺跡（48）、塚本山古墳群（60）にあり、とくに北堀新田前遺跡（42）、村後遺跡（48）では前方後方形周溝墓を含む点が注目される。前期古墳では、前方後方墳の鷺山古墳（57）、前方後円墳の前山１号墳（40）、最大規模の首長墳として著名である。中期初頭には粘土槨をもつ方墳の前山２号墳（41）、中期中葉には微高地上の大型円墳の公卿塚古墳（37）等、多様な古墳が確認されている。さらに、中期後半以降には、西五十子古墳群（52）塚本山古墳群（60）などの古式群集墳の造営も開始され、これ以降終末期に至るまで、各地で古墳の築造が継続する。

奈良時代には、古墳時代と比べ、急激に集落規模が縮小する。古墳時代の集落の中心となった下浅見・高関周辺地域、西富田地域では、住居跡はほとんど見られない。ややまとまって検出された遺跡としては社具路遺跡（11）、東牧西分遺跡（26）、雷電下遺跡（30）、および地神・塔頭遺跡（18）、七色塚遺跡（36）等わずかであり、それ以外の遺跡では10軒前後が検出される程度とにとどまる。

さらに時代が下ると、確認できる遺構密度はいっそう減少し、一定の規模を維持する集落は、社具路遺跡（11）、東牧西分遺跡（26）、雷電下遺跡（30）、薬師元屋舗遺跡（10）、下田遺跡（35）、古川端遺跡（54）に限られ、やがて竪穴住居跡は検出されなくなる。

中世の本庄市域は武蔵武士児玉党の中心地であり、周辺には児玉党本宗家の館とも推定される栗崎の堀の内（50）の他に、北堀（49）、東本庄（51）、東富田、西富田（14）、四方田（20）等に屋敷・館に関連する地名・伝承・地割が多く残る。久下東遺跡（2）付近では屋敷の伝承は無いが、先年の調査で在地有力者層の屋敷跡が検出され、「本庄」氏との関係が指摘されている。早稲田大学による大久保山丘陵の発掘調査では、大久保山寺院跡（46）で五輪塔・青石塔婆・剣頭文軒平瓦などが出土し、浅見山Ⅰ遺跡（38）でも瓦窯跡や寺院跡と考えられる遺構が検出されている。また、大久保山を中心とする市域各所で複数の中世銅鏡や中世瓦などが出土している。　　（本庄市教育委員会）



第１図　周辺の遺跡

★北堀新田 1. 北堀久下塚北 2. 久下東 3. 久下前 4. 二本松 5. 西富田新田 6. 弥藤次 7. 夏目西 8. 夏目 9. 薬師 10. 薬師元屋舗 11. 柱具路 12. 笠ヶ谷戸 13. 雌濠 14. 西富田本郷 15. 西富田・四方田条里 16. 西富田前田 17. 丸反田 18. 地神・塔頭 19. 今井条里 20. 四方田氏館跡 21. 四方田 22. 後張 23. 川越田 24. 今井川越田 25. 梅沢 26. 東牧西分 27. 関根氏館跡 28. 浅見境北 29. 飯玉東 30. 雷電下 31. 根田 32. 山根 33. 観音塚 34. 元富 35. 下田 36. 七色塚 37. 公卿塚古墳 38. 浅見山Ⅰ 39. 大久保山 40. 前山１号墳 41. 前山２号墳 42. 北堀新田前 43. 宥勝寺裏埴輪窯跡 44. 宥勝寺北裏 45. 東谷 46. 大久保山寺院跡 47. 東谷古墳 48. 村後（美里町）49. 北堀本田館跡 50. 薬崎館跡 51. 東本庄 52. 西五十子古墳群 53. 田端屋敷 54. 古川端 55. 浅見境 56. 中畑 57. 鷲山古墳 58. 鷲山南 59. 南ノ前 60. 塚本山古墳群 61. 十二町（美里町）62. 後田（同）63. 砂田（同）64. 向田（同）65. 日ノ森（同）66. 石蒔Ａ（深谷市）67. 石蒔Ｂ（同） 68. 北原古墳群 69. 本庄城址 70. 天神林 71. 天神林Ⅱ 72. 薬師堂 73. 塚合古墳群

Ⅲ　調査の方法と経過

1．調査の方法

試掘調査の成果等を参考に、遺構確認面をローム層上面とした。現地表下 30 ～ 40cm までバックフォーを用いて掘削し、ローム上面においては人力によって精査・遺構確認を行った。竪穴住居跡・土壙、溝址は、部分的に確認されているものは調査区壁を用い、それ以外の遺構については遺構内にセクションベルトを設定し、それぞれの区画ごとに掘削し土層観察を行った。

遺構測量は、各遺構の平面図および断面図の縮尺基準を 1 ／ 20 として作成した。写真撮影は 35 ㎜モノクロ・35 ㎜リバーサルの各フィルムと、デジタルカメラを用いた。

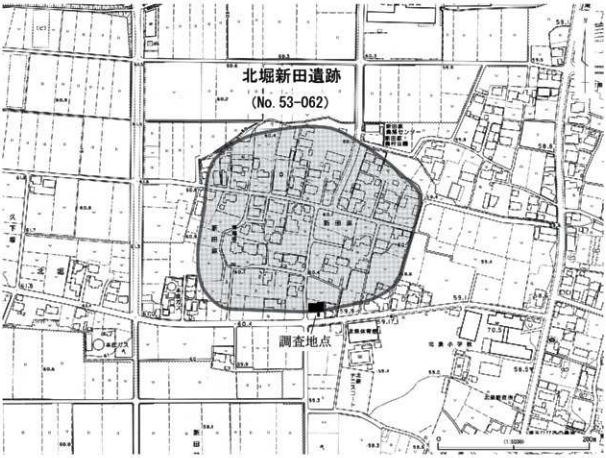
出土遺物の注記は、おもにスタンプを使用し、遺跡の略号は、53-062 とした。遺物の接合には、溶剤型接着剤（セメダイン C）を用い、復元には石膏を使用した。遺物の写真撮影には、6 × 7 判モノクロフィルムを使用した。

2．調査の経過

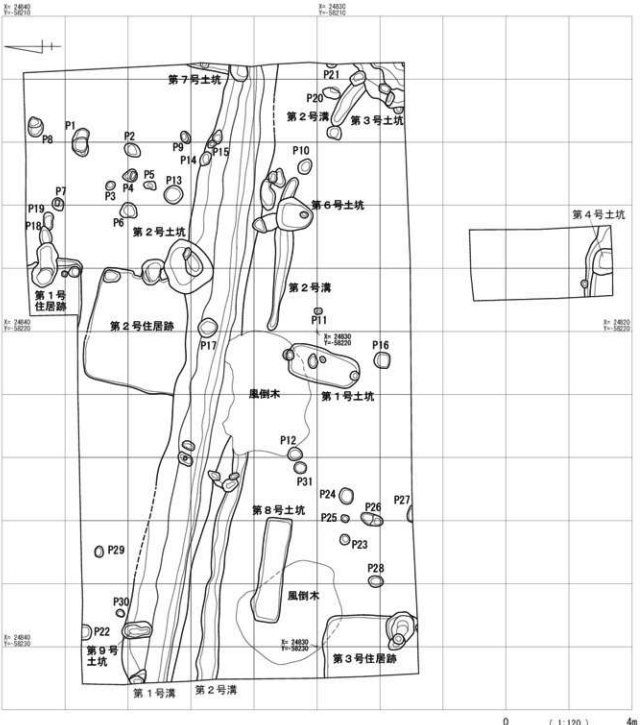
発掘調査は平成 21 年 4 月 8 日から同年 4 月 24 日にかけて実施した。発掘調査終了後、平成 21 年 4 月 28 日付け、本教文保第 26 号「北堀新田遺跡における発掘調査の終了にかかる発掘現場引渡書」の通知を行い、事業者へ引き渡しを行った。

整理作業は平成 21 年 6 月 15 日から実施し、22 年 3 月 12 日付けで報告書を刊行した。

（本庄市教育委員会）



第２図　北堀新田遺跡の位置


X= 24840
Y= 58210
X= 24830
Y= 58210
第7号土坑
P21
P20
第2号溝
第3号土坑
P1
P8
P2
P9
P15
P14
P10
P5
P13
P7
P3
P4
P19
P18
P6
第6号土坑
第2号土坑
第4号土坑
第1号
住居跡
第2号溝
X= 24840
Y= 58220
第2号住居跡
P11
X= 24830
Y= 58220
X= 24820
Y= 58220
P17
P16
風倒木
第1号土坑
P12
P31
P24
P26
P27
第8号土坑
P25
P23
P29
P28
風倒木
P30
P22
X= 24840
Y= 58230
第9号
土坑
X= 24830
Y= 58230
第3号住居跡
第1号溝
第2号溝
0
(1:120)
4m

第３図　調査区全体図

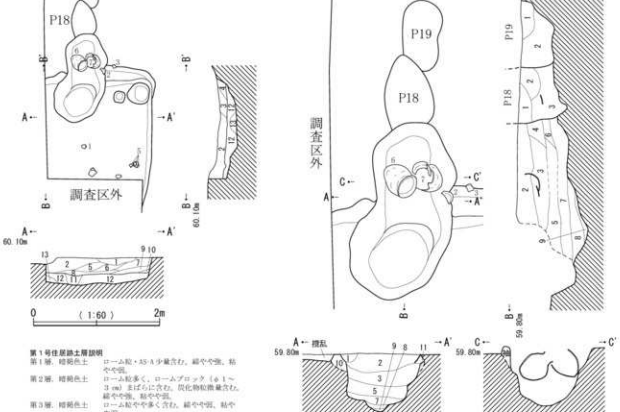
Ⅳ　遺構と遺物

1．竪穴住居跡

第１号住居跡（第４・５図、第１表、図版２・６）

調査区の北端に位置する。南東側を除いた大部分が調査区域外にかかっている。カマド先端部を18号ピットに切られる。確認部の遺存状態は比較的良好である。

平面形は南北1.68m以上、東西2.15m以上の方形ないし長方形を呈するものと思われる。主軸方向はカマドの位置からＮ－88°－Ｅである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は24㎝を測る。ロームブロック混じりの黒褐色土や暗褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的に



第１号住居跡土層説明

第１層．暗褐色土　ローム粒・ASｰA少量含む。締やや強。粘やや弱。
第２層．暗褐色土　ローム粒多く、ロームブロック（φ１～３㎝）まばらに含む。焼化物粒微量含む。締やや強。粘やや弱。
第３層．暗褐色土　ローム粒やや多く含む。締やや弱。粘やや強。
第４層．黒褐色土　ローム粒多く含む。締やや強。粘やや強。
第５層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ0.5㎝）・粘土ブロック（φ１㎝）少量。焼土粒微量含む。締強。粘やや弱。
第６層．暗褐色土　ローム粒・焼土粒・粘土ブロック（φ１㎝）少量含む。締やや強。粘やや弱。
第７層．暗褐色土（赤色味あり）ローム粒やや多く、焼土粒少量含む。締やや強。粘やや弱。
第８層．黒褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ１㎝以下）・焼土粒少量。焼化物粒微量含む。締やや強。粘やや弱。
第９層．黒褐色土　ローム粒少量。焼化物粒・焼土粒微量含む。締やや強。粘やや強。
第10層．暗黄褐色土　地質ローム混在する。締やや強。粘やや強。
第11層．黒褐色土　ローム粒・焼土粒少量。焼化物粒微量含む。締やや強。粘やや強。粘土面。
第12層．暗褐色土と　ロームブロック（不整形）の混在土。締強。粘やや強。層直面極めて硬化する。粘土面。
第13層．明黄褐色土　ローム主体。（ブロックを含む）締強。粘やや強。層の表面極めて硬化する。層り方堆土。

第１号住居跡カマド土層説明

第１層．暗褐色土　焼土粒微量。締強。粘強。
第２層．暗褐色土（赤味あり）ローム粒・焼土粒少量含む。締やや強。粘やや弱。
第３層．暗褐色土（赤味あり）ローム粒・焼土粒やや多く含む。締やや強。粘やや強。粘質土少量混合する。
第４層．暗褐色土（赤味あり）焼土粒少量。ローム粒・焼化物粒微量含む。締やや強。粘やや強。
第５層．黒褐色土　焼土粒・炭やや多く含む。ローム粒・焼化物粒少量含む。締やや弱。粘やや強。
第６層．暗褐色土（赤味あり）焼土粒・ローム粒少量含む。焼化物粒微量含む。粘質土ブロック混合。締やや強。粘やや強。
第７層．暗黄褐色土　ローム粒やや多く含む。焼土粒・焼化物粒微量含む。締弱。粘やや弱。
第８層．暗褐色土　ローム粒・焼土粒やや多く含む。締やや弱。粘やや強。
第９層．黄褐色土　ローム主体。暗褐色土混じる。締やや弱。粘やや弱。
第10層．灰褐色粘質土　ローム粒・焼土粒・黒褐色土少量含む。締強。粘強。
第11層．灰褐色粘質土と暗褐色土の混合土　締やや弱。粘やや強。カマド補強土の崩落か。

Ｐ18

第１層．暗褐色土　ローム粒・焼土粒少量含む。締やや強。粘やや弱。
第２層．暗褐色土　ローム粒多く含む。締やや強。粘やや強。
第３層．暗褐色土　ローム粒・焼土粒少量含む。締やや強。粘やや弱。

Ｐ19

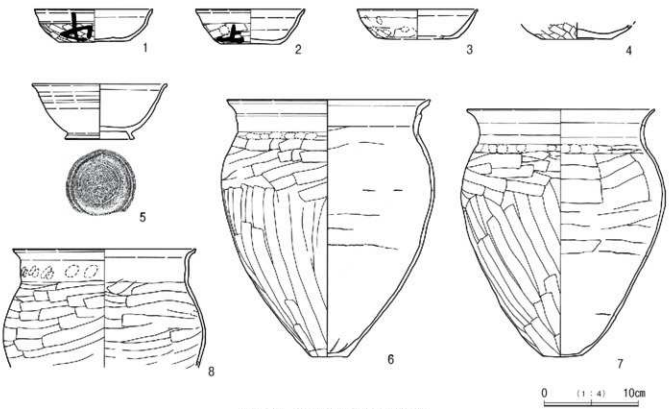
第１層．暗褐色土　ローム粒やや多く含む。締やや強。粘弱。
第２層．暗褐色土とロームの混合土　締やや弱。粘弱。

第４図　第１号住居跡

硬くしまる。掘り方は床下全面に及んでいる。床面からの深さは8～16cmを測り、断面は皿状に近い。周溝は確認されなかった。ピットは2基検出されている。うち1基は直径18cm、深さ10cmを測る。南側に近接するもう1基は直径41cm、深さ10cmを測り、カマドの右側、南東隅という位置からみて貯蔵穴であった可能性も考えられる。

カマドは東壁のほぼ中央に位置する。先端部を18号ピットによって壊されているが、壁外に中央部がややふくらんだ逆U字形に突出しており、内部より完形の長胴甕2点が出土している。袖部は灰褐色粘土を用いて構築している。左袖の一部が残存するだけである。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積しているが、火床面はあまり焼けていない。基底部は深さ20cmほどの皿状に掘り込まれている。

遺物は須恵器坏・高台付碗・甕、土師器坏・甕が出土している。土師器の出土は比較的多量にのぼる。1～4は土師器坏、5は高台付碗。1は「中」、床面出土の2は「上」の墨書がみられる。6～8は土師器甕。いずれもカマドから出土したものであり、特に完形の6・7は横並びの状態でカマド内に遺存していた。伴出土器のあり方から平安時代前期前半の所産と考えられる。



第5図　第1号住居跡出土遺物

第1表　第1号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）			技法	胎土	色調		焼成	備考
		口径	底径	器高			外面	内面		
1	土師器坏	12.5	7.1	3.5	外面：口縁部ヨコナデ、胴部から底部ヘラケズリ、口縁部に一条の沈線。内面ヨコナデ後ミガキ。外面に「中」の墨書	角閃石・白色粒・黒色粒	明橙褐色	明橙褐色	良好	ほぼ完形

2	土師器坏	(11.6)	6.3	3.7	外面：口縁部ヨコナデ、胴部から底部ヘラケズリ。内面ヨコナデ。外面に「上」の墨書	角閃石・白色粒・黒色粒	橙褐色	橙褐色	良好	1/3 残存
3	土師器坏	(12.8)	(8.8)	3.2	外面：口縁部ヨコナデ、胴部から底部ヘラケズリ、一部指頭によるナデ。内面：ヨコナデ。	石英・白色粒	暗橙褐色	暗橙褐色	良好	1/4 残存
4	土師器坏	－	(7.4)	＜1.7＞	外面：胴部から底部ヘラケズリ。内面：ヨコナデ。	角閃石・白色粒・赤色粒	暗赤褐色	暗赤褐色	良好	底部片
5	須恵器高台付碗	(14.4)	7.4	5.9	外面、内面ともロクロ成形によるヨコナデ、高台は底部回転糸切り後貼り付け。内面にスス付着	石英・白色粒	灰褐色	黒褐色	良好	2/3 残存
6	土師器甕	21.6	4.0	27.2	外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半横方向のヘラケズリ、下半縦方向のヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ	角閃石・白色粒・赤色粒	明橙褐色、下半は暗褐色	明橙褐色	良好	完形
7	土師器甕	(20.0)	4.3	26.3	外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半横方向のヘラケズリ、下半縦方向のヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ	チャート・白色粒・赤色粒	にぶい赤褐色、下半は暗褐色	にぶい赤褐色	良好	ほぼ完形
8	土師器甕	(19.4)	－	＜127＞	外面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ。	石英・チャート・白色粒・赤色粒・黒色粒	橙褐色	暗赤褐色	良好	口縁～胴部上半残存

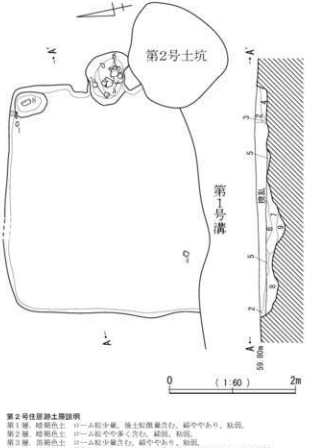
第２号住居跡（第６・７図、第２表、図版２・６）

調査区の北端、第１住居跡のすぐ南側に位置する。南側を第１号溝、南東側を第２号土坑に切られる。さらに中央部に攪乱を受けており、遺存状態はやや不良である。

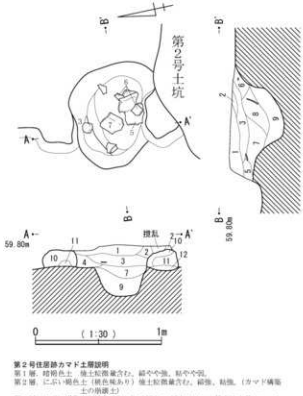
平面形は南北 3.28m 以上、東西 3.60m 以上の方形を呈するものと思われる。主軸方向はカマドの位置からＮ－80°－Ｗである。壁は比較的急傾斜で掘り込まれており、最大壁高は 21 ㎝を測る。ロームブロック混じりの黒褐色土や暗褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。全体的にやや軟弱である。掘り方は東側を除いた床下のほぼ全面に及んでいる。床面からの深さは６～30 ㎝を測り、中央部付近が特に深く掘りくぼめられている。周溝は確認されなかった。北東隅よりピットが１基検出されている。直径 52 ㎝、深さ９㎝を測り、位置的にみて貯蔵穴であった可能性が高い。

カマドは東壁のほぼ中央に位置する。先端部と石袖部の一部を第２号土坑によって壊されているが、壁外に中央部がややふくらんだ逆Ｕ字形に突出している。袖部は黄褐色粘土などを用いて構築している。燃焼部は住居の壁面を掘り込んで造られており、広い範囲にわたって焼土が堆積している。火床面はあまり焼けていない。基底部は深さ 35 ㎝ほどの鍋底状に掘り込まれている。

遺物は須恵器坏・高台付碗・甕、土師器坏・皿・甕、不明鉄製品、磨石が出土している。土師器の出土は比較的多量にのぼる。１は内面に文字種不明の墨書が施された須恵器坏、２は土師器坏、３は土師器皿、４は須恵器高台付碗。１と４は床面からの出土である。５～７の土師器甕はいずれもカマドから出土した。８は覆土中出土の磨石。全面に良好な研磨痕を残しており、部分的には線状痕も確認される。伴出土器のあり方から平安時代前期後半の所産と考えられる。



第２号住居跡土層説明
第１層．暗褐色土　ローム粒少量．地土粒微量含む．締ややあり．粘弱．
第２層．暗褐色土　ローム粒やや多く含む．締弱．粘弱．
第３層．黒褐色土　ローム粒少量含む．締ややあり．粘弱．
第４層．暗褐色土（黄色味あり）ローム粒やや多く含む．締ややあり．粘やや弱．
第５層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（不整形）やや多く含む．締やや弱．粘やや弱．硬化面なし．貼床面．
第６層．黒褐色土　ローム粒少量含む．締やや弱．粘やや弱．貼床面．
第７層．にぶい褐色土　ローム粒少量含む．締強．粘強．層ヵ方埋土．
第８層．黄褐色土　ロームブロック混合する（不整形）．締やや弱．粘弱．層ヵ方埋土．
第９層．にぶい褐色土　ロームブロックやや多く含む（φ１cm主体）．締強．粘強．層ヵ方埋土．



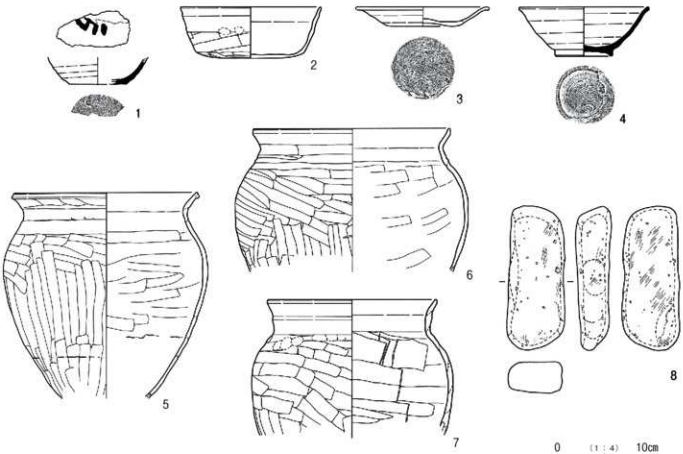
第２号住居跡カマド土層説明
第１層．暗褐色土　地土粒微量含む．締やや強．粘やや弱．
第２層．にぶい褐色土（黄色味あり）地土粒微量含む．締強．粘強．（カマド構築土の崩壊土）
第３層．にぶい褐色土（黄色味あり）２層と11層より暗い．地土粒少量．ローム粒微量含む．締強．粘強．（カマド構築土の崩壊土）
第４層．黒褐色土　ロームブロック（φ１cm）・ローム粒・地土粒・粘質土粒少量含む．締やや強．粘やや強．
第５層．暗褐色土　地土粒・ローム粒微量含む．締やや強．粘やや弱．
第６層．暗赤褐色土　地土粒多く含む．締やや強．粘やや弱．
第７層．黒褐色土　ロームブロック（φ0.5cm）・ローム粒・地土粒・粘質土粒・炭少量含む．締弱．粘やや強．
第８層．暗褐色土（赤味あり）地土粒やや多く含む．締やや強．粘やや強．
第９層．暗黄褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ１cm以下）多く含む．地土・炭化物・炭含まない．締やや弱．粘やや弱．
第10層．にぶい褐色土（黄色味あり）粘質土・地土粒・炭化物粒・ローム粒少量含む．締強．粘強．
第11層．黄褐色土　ローム土層．締やや強．粘やや強．
第12層．暗褐色土（黄色味あり）ローム粒多く含む．締やや弱．粘やや弱．

第６図　第２号住居跡

第２表　第２号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）			技法	胎土	色調		焼成	備考
		口径	底径	器高			外面	内面		
1	須恵器坏	－	(6.0)	＜2.8＞	外面、内面ともロクロ成形によるヨコナデ。底部は回転糸切り。内面文字種不明墨書	白色粒・黒色粒	灰白色	灰白色	良好	体部下半～底部残存
2	土師器坏	(14.8)	－	5.5	外面：口縁部ヨコナデ、胴部から底部ヘラケズリ。内面：ヨコナデ	石英・白色粒・赤色粒・黒色粒	暗褐色	暗褐色	良好	1/3残存
3	土師器皿	(14.2)	6.5	2.1	外面、内面ともヨコナデ。底部は回転糸切り	チャート・白色粒・黒褐色粒	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	不良	1/4残存
4	須恵器高台付椀	(14.0)	6.1	5.2	外面、内面ともロクロ成形によるヨコナデ。底部回転糸切り後高台貼り付け	チャート・白色粒	暗黒褐色	暗黒褐色	良好	1/2残存
5	土師器甕	(19.8)	－	＜21.8＞	外面：口縁部ヨコナデ、段をもつコの字状、胴部上半横方向のヘラケズリ、下半縦方向のヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ	石英・白色粒・赤色粒・黒色粒	にぶい明赤褐色	にぶい橙褐色	良好	口縁～胴部上半残存
6	土師器甕	(21.0)	－	＜15.2＞	外面：口縁部ヨコナデ、胴部上半横方向のヘラケズリ、下半縦方向のヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ	石英・白色粒・黒色粒	にぶい褐色	にぶい赤褐色	良好	口縁～胴部上半残存

7	土師器甕	(18.0)	－	＜14.3＞	外面：口縁部ヨコナデ、段をもつコの字状、胴部上半横方向のヘラケズリ、下半縦方向のヘラケズリ。内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ	石英・チャート・白色粒	にぶい橙褐色	暗赤褐色	良好	口縁～胴部上半残存
8	石製品磨石	長さ15.3	幅6.1	厚さ3・8	全面に良好な研磨痕、部分的に擦状痕。特に一側縁は明瞭に窪む	－	－	－	－	完形、安山岩、重量637.1 g



第７図　第２号住居跡出土遺物

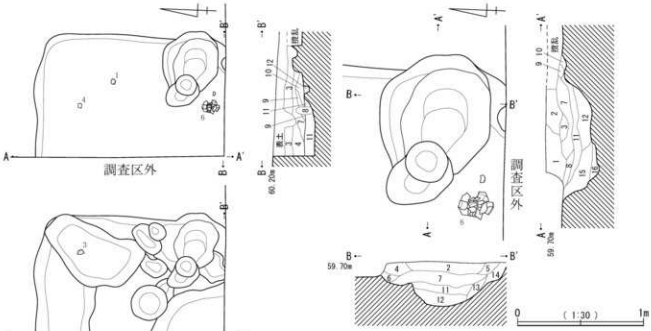
第３号住居跡（第８・９図、第３表、図版３・７）

調査区の南西端に位置する。北東側を除いた大部分が調査区域外にかかっているが、確認部の遺存状態は比較的良好である。

平面形は南北3.08m以上、東西1.96m以上の方形ないし長方形を呈するものと思われる。主軸方向はカマドの位置からＮ－88°－Ｗである。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、最大壁高は35㎝を測る。ロームブロック混じりの黒褐色土や暗褐色土を用いて貼り床面が形成されていた。部分的に硬くしまる。掘り方は床下のほぼ全面に及んでいる。床面からの深さは６～18㎝を測り、起伏に富む。周溝およびピットは確認されなかった。

カマドは東壁のほぼ中央に位置する。先端部および上面に攪乱を受けているが、壁外に中央部がややふくらんだ逆Ｕ字形に突出している。袖部は地山を用いて構築したと思われるが、残存しない。燃焼部には広い範囲にわたって焼土が堆積しているが、火床面は不明瞭である。基底部は深さ45㎝ほどの鍋底状に掘り込まれている。

遺物は須恵器坏・高台付瓶・甕、土師器坏・高台付坏・高台付皿・甕、灰釉陶器、小形磨石が出土している。土師器の出土は比較的多量にのぼる。2はカマド出土、3は掘り方出土の土師器坏である。須恵器坏1、土師器高台付皿4、土師器碗5、土師器甕6は覆土中からの出土である。伴出土器のあり方から平安時代前期後半の所産と考えられる。



第3号住居跡カマド土層説明

第1層．にぶい黄褐色土　焼土粒多量，ローム粒・炭化物粒少量含む．灰黄褐色粘質土混合．締強，粘やや強．
第2層．にぶい黄褐色土　焼土粒・焼土ブロック（不整形）多量，ロームブロック（φ1cm）・炭化物粒少量．締強，粘強．
第3層．赤褐色土　焼土土塊，締弱，粘弱．
第4層．にぶい黄褐色土　焼土粒やや多く，ローム粒・炭化物粒微量含む．締強，粘強．
第5層．暗褐色粘質土（赤味あり）締強，焼土粒やや多く含む．
第6層．にぶい暗黄褐色土　ローム粒少量，焼土粒微量．締強，粘やや強．
第7層．暗褐色土　焼土粒・焼土ブロック（φ0.5cm）多量，ローム粒・灰少量，炭化物粒微量．締強，粘強．
第8層．暗褐色土（黄色味あり）ローム粒少量，焼土粒・炭化物粒微量含む．締強，粘やや強．
第9層．黄褐色土　地床ローム．
第10層．暗褐色土と崩落ロームの混合土
第11層．暗褐色土　焼土粒・ロームブロック（φ0.5～2cm）少量含む．締強，粘やや強．
第12層．暗褐色土　ローム粒やや多く含む，焼土粒・炭化物粒微量含む．締強，粘やや強．
第13層．暗褐色土　ロームブロック（不整形）含む．締強，粘強．
第14層．暗褐色土　ロームブロック（φ0.5cm～不整形）多く含む．締やや強，粘やや強．
第15層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ0.5～1cm）多く含む，焼土粒・炭化物粒微量含む．締強，粘やや強．

第3号住居跡土層説明

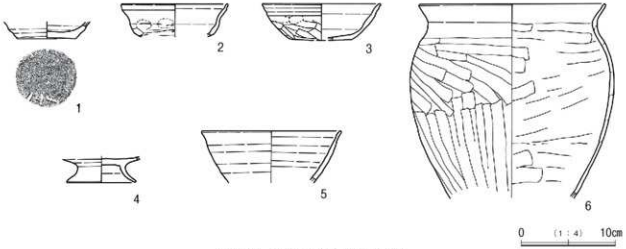
第1層．暗褐色土　AS-A微量含む．ローム粒含む．
第2層．暗灰褐色土　AS-A少量含む．ローム粒・焼土粒含む．
第3層．暗灰褐色土　AS-Aやや多量含む．ローム粒・焼土粒含む．
第4層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ1cm）・焼土粒やや多く含む．締やや強，粘やや強．
第5層．暗褐色土　ローム粒やや多く，ロームブロック（φ1cm）微量含む．締やや強，粘やや強．
第6層．暗褐色土（黄色味あり）ローム粒多く含む．締やや弱，粘やや弱．
第7層．黒褐色土　ロームブロック（φ0.5cm）・焼土粒少量含む．締やや弱，粘やや強．
第8層．暗褐色土　焼土粒多量，ローム粒・粘質土ブロック（φ0.5cm以下）少量含む．締やや強，粘やや強．
第9層．暗褐色土　ローム粒・焼土粒やや多く含む．締やや強，粘やや強．
第10層．暗褐色土　ロームブロック（φ0.5～1cm）多く，焼土ブロック（φ0.5cm）・にぶい褐色粘質土（不整形）少量含む．炭化物微量含む．締やや強，粘強．
第11層．暗褐色土　混入物（ロームブロックφ1以下・焼土粒・粘質土ブロック（不整形）多量含む．締強，粘強．焼の影響やや硬化する．粘床面．
第12層．暗褐色土　ローム粒ブロック多く含む．締やや弱，粘やや強．粘床面．
第13層．暗褐色土　ロームブロック（φ0.5cm）少量．締やや強，粘やや強．粘床面．
第14層．暗褐色土とロームの混土　締やや弱，粘やや強．粘床面．
第15層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（不整形）やや多く含む．締やや弱，粘やや強．掘り方埋土．
第16層．黒褐色土　ローム粒少量含む．締やや強，粘やや強．掘り方埋土．

第8図　第3号住居跡

第3表　第3号住居跡出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）			技法	胎土	色調		焼成	備考
		口径	底径	器高			外面	内面		
1	須恵器坏	－	6.3	＜1.8＞	外面、内面ともロクロ成形によるヨコナデ。底部回転糸切り	角閃石・白色粒	灰白色	灰白色	良好	体部下半～底部残存
2	土師器坏	(11.4)	－	＜3.5＞	外面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラケズリ。内面：ヨコナデ	角閃石・チャート・白色粒・赤色粒	暗赤褐色	暗赤褐色	良好	口縁～体部下半残存

3	土師器坏	(12.6)	(6.5)	3.9	外面：口縁部ヨコナデ、胴部から底部ヘラケズり。内面：ヨコナデ	白色粒・黒色粒	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	1/3 残存
4	土師器高台付皿？	－	(7.2)	＜2.8＞	外面：ヨコナデ、高台貼り付け	角閃石・白色粒	にぶい明赤褐色	にぶい明赤褐色	良好	底部～高台部残存
5	土師器碗	(14.8)	－	＜5.5＞	外面、内面ともヨコナデ。	角閃石・白色粒・赤色粒・黒色粒	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	良好	口縁～体部下半残存
6	土師器甕	(20.0)	－	＜20.7＞	外面：口縁部ヨコナデ、段をもつコの字状、胴部上半横方向のヘラケズり、下半縦方向のヘラケズり。内面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラナデ	石英・角閃石・白色粒・黒色粒	にぶい褐色	にぶい褐色	良好	口縁～胴部上半残存



第９図　第３号住居跡出土遺物

２．溝状遺構

第１号溝（第 10・11 図、第４表、図版３・４・７）

調査区の西端から東端までほぼ直進している。南側に近接して第２号溝が並行するように走る。各所で攪乱を受けているが、遺存状態は比較的良好である。途中で第２・第７号土坑を切り、第７・第９号土坑、P14・P15・P17 に切られる。

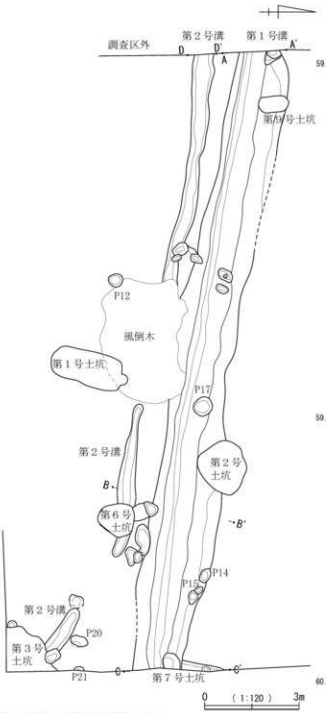
確認部分の全長は 19.89m、上幅 1.53 ～ 2.18m、底幅 0.10 ～ 0.22m、深さ 0.82 ～ 0.96m を測る。断面はＶ字状に近いが、北側にテラス状の平坦面を伴う。底面はやや起伏をもち、北西から南東に向けてゆるやかに傾斜する。

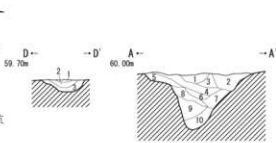
遺物は須恵器坏・蓋・高台付坏・甕、土師器坏・甕、灰釉陶器が出土している。１は須恵器高台付坏、２は須恵器甕、３は灰釉陶器甕。いずれも覆土中より出土した。伴出土器のあり方から平安時代前期後半の所産と考えられる。

第２号溝（第 10 図、図版３）

調査区の西端から第１号溝と並行するように直進した後、ゆるやかな弧を描きながら南東隅近くまで途切れ途切れに走る。各所に攪乱を受けており、また掘り込みも浅いことから、遺存状態は不良である。途中で第３・第６号土坑に切られる。

確認部分の全長は 19.70m、上幅 0.33 ～ 0.72m、底幅 0.10 ～ 0.48m、深さ 0.05 ～ 0.19m を測る。断面は開いたＵ字状を呈する。底面はやや起伏をもち、北西から南東に向けてゆるやかに傾斜する。





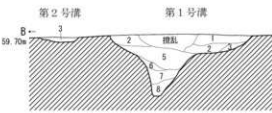
第１号溝・第２号溝土層説明

第１号溝ＡＡ'

第１層．暗褐色土　ローム粒少量含む。締やや強。粘やや強。
第２層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ1cm以下）やや多く含む。締やや弱。粘やや強。
第３層．暗褐色土　ローム粒少量含む。締強。粘やや強。
第４層．暗褐色土　ローム粒少量含む。締やや弱。粘やや強。
第５層．暗褐色土　ロームブロック（φ1cm以下）やや多く含む。締やや弱。粘やや弱。
第６層．暗褐色土　ローム粒少量。ロームブロック（φ0.5cm）微量含む。締やや強。粘やや弱。
第７層．暗褐色土（黄色味あり）ローム粒・ロームブロック（φ0.5cm主体）多く含む。
第８層．暗褐色土　ローム粒やや多く含む。締やや弱。粘やや強。
第９層．暗褐色土（黄色味あり）ロームブロック（φ1cm以下）多く含む。締やや強。粘やや強。
第10層．暗褐色土とロームブロック（不整形）の混合土　締やや弱。粘やや強。

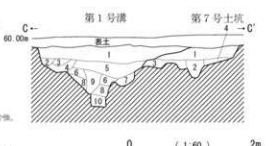
第２号溝ＤＤ'

第１層．暗褐色土　ローム粒微量含む。締やや弱。粘やや強。
第２層．暗褐色土　ローム粒やや多量。ロームブロック（φ1cm）局所的に含む。締やや弱。粘やや強。
第３層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ0.5cm程度）多量含む。



第１号溝ＢＢ'・土層説明

第１層．暗褐色土　ローム粒少量。焼土粒微量含む。締やや強。粘弱。
第２層．暗褐色土　ローム粒やや多く含む。ロームブロック（φ1cm以下）少量。焼土粒微量含む。締やや弱。粘やや強。
第３層．暗褐色土（暗め）ローム粒やや多く含む。締やや弱。粘やや弱。
第４層．暗黄褐色土　ローム粒・不整形ロームブロック多く含む。締やや強。粘やや弱。
第５層．暗褐色土　ローム粒多く。ロームブロック（φ1cm程度）やや多く含む。締やや弱。粘やや強。
第６層．黒褐色土　ローム粒少量含む。締やや強。粘やや弱。
第７層．黒褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ0.5cm）やや多く含む。締やや弱。粘やや弱。
第８層．にぶい黄褐色土 ローム粒極めて多く混合する。締やや弱。粘やや強。
※流水痕跡は確認できず



第１号溝・第７号土坑（調査区東壁）ＣＣ'・土層説明

第１号溝

第１層．暗灰褐色土　AS-kやや多く含む。締強。粘弱。
第２層．暗褐色土　ローム粒多量・ロームブロック（φ1cm）微量含む。締やや強。粘やや弱。
第３層．暗褐色土（暗め）ローム粒微量含む。締強。粘やや強。
第４層．黒褐色土　ローム粒やや多く含む。局所的にロームブロック（φ4cm）含む。締強。粘強。
第５層．暗褐色土　ローム粒少量。焼土粒・炭化粒粒微量含む。締やや強。粘やや強。
第６層．暗褐色土（暗め）ローム粒やや多く含む。締やや強。粘やや強。
第７層．暗褐色土　ローム粒少量含む。締やや強。粘やや強。
第８層．黒褐色土（黄色味あり）ローム粒・ロームブロック（φ1cm）多く含む。締やや弱。粘やや強。
第９層．黒褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ0.5cm）少量含む。締やや強。粘やや強。
第10層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（不整形）やや多く含む。締やや強。粘やや強。

第７号土坑

第１層．にぶい黒褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ2cm）・焼土粒微量含む。締やや弱。粘弱。
第２層．暗色土と黒褐色土の混合土　締やや弱。粘弱。
第３層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（不整形）多く含む。締やや弱。粘やや弱。
第４層．暗黄褐色土　ローム混合する。締やや弱。粘やや弱。

第10図　第１・２号溝

第 11 図　第 1 号溝出土遺物

第 4 表　第 1 号溝出土遺物観察表

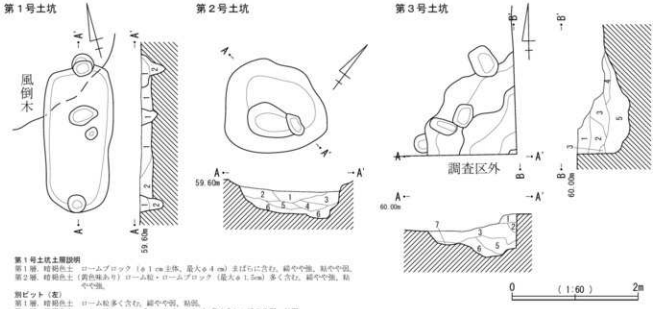
No.	器種	法量（cm）			技法	胎土	色調		焼成	備考
		口径	底径	器高			外面	内面		
1	須恵器高台付坏	－	(6.2)	＜23＞	外面、内面ともロクロ成形によるヨコナデ、底部回転糸切り後高台貼り付け	角閃石・白色粒	灰白色	灰白色	良好	体部下半～高台部残存
2	須恵器甕？	－	－	－	外面、内面ともロクロ成形によるヨコナデ。	白色粒・黒色粒	明黒色	灰色	良好	口縁部片
3	灰釉陶器甕？	－	(13.0)	＜33＞	内面に灰釉、高台貼り付け	黒色粒	明灰色	明オリーブ灰色	良好	胴部下半～底部残存

遺物は少量の須恵器高台付坏、土師器坏・甕が出土している。いずれも細片であり、図示するまでには至らなかった。伴出土器のあり方から平安時代の所産と考えられる。

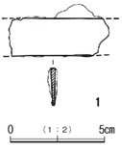
3．土坑

第 1 号土坑（第 12・13 図、第 5 表、図版 4・7）

調査区の中央部南寄りに位置する。上面を小ピット 3 基に切られるが、遺存状態は比較的良好である。



第 12 図　第 1・2・3 号土坑



第13図　第1号土坑出土遺物

平面形は長径227cm、短径112cm以上、深さ21cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はN－15°－Eである。断面形は皿状に近く、底面はおおむね平坦である。中央部東寄りに直径21cm、深さ11cmの小ピット1基を伴う。

遺物は少量の須恵器坏・甕、土師器坏・甕、鉄製品が出土している。1は板状の鉄製品。両端を欠損しているが、刀子の可能性も考えられる。伴出土器のあり方から平安時代の所産と考えられる。

第5表　第1号土坑出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）			技法	胎土	色調		焼成	備考
		口径	底径	器高			外面	内面		
1	鉄製品	長さ<5.4>	幅2.1	厚さ0.5	板状、全面に錆	－	－	－	－	刀子か、重量13.1 g

第2号土坑（第12図、図版4）

調査区の中央部北東寄りに位置する。北西側で第2号住居跡を切り、南側で第1号溝に切られる。遺存状態は良好である。

平面形は長径162cm、短径148cm、深さ44cmの不整楕円形を呈する。長軸方向はN－53°－Eである。断面形は鍋底状に近く、底面は起伏をもつ。

遺物は少量の須恵器坏・高台付碗、土師器坏・甕が出土している。いずれも細片であり、図示するまでには至らなかった。伴出土器や遺構の切り合いなどから平安時代前期後半の所産と考えられる。

第3号土坑（第12図、図版4）

調査区の南東隅に位置する。北西側を除いた大部分が調査区域外にかかっている。北西側で第2号溝を切る。

平面形は南北160cm以上、東西144cm以上、深さ82cm以上の不整円形ないし楕円形を呈するものと思われる。長軸方向は不明である。確認部の断面形は鍋底状に近く、底面は起伏に富む。

遺物は須恵器坏・甕、土師器坏・甕が出土している。いずれも細片であり、図示するまでには至らなかった。伴出土器のあり方から平安時代の所産と考えられる。

第4号土坑（第14図、図版4）

調査区の南側拡張区に位置する。北側を除いた大部分が調査区域外にかかっている。

平面形は南北62cm以上、東西84cm以上、深さ17cm以上の楕円形を呈するものと思われる。推定長軸方向はN－3°－Wである。断面形は鍋底状に近く、底面はわずかに起伏をもつ。

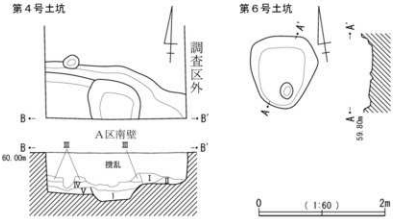
遺物は少量の須恵器坏・甕、土師器坏・甕、磨石が出土している。いずれも細片であり、図示するまでには至らなかった。伴出土器のあり方から平安時代の所産と考えられる。

第6号土坑（第14図、図版5）

調査区の南東側に位置する。北側で2号溝を切る。

平面形は長径114cm、短径106cm、深さ16cmの楕円形を呈する。長軸方向はN－9°－Eである。断面形は皿状に近く、底面は起伏をもつ。南側に直径25cm、深さ18cmの小ピット1基を伴う。

遺物の出土はみられなかったが、覆土のあり方などから平安時代の所産と考えられる。

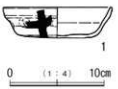


第14図　第４・６号土坑

第７号土坑（第３・15図、第６表、図版５・７）

調査区の東端に位置する。南側を第１号溝に切られる。西側を除いた大部分が調査区域外にかかっている。

平面形は南北140cm以上、東西22cm以上、深さ48cmの方形ないし楕円形を呈するものと思われる。長軸方向は不明である。断面形は皿状に近い。底面は起伏をもち、南側に直径20cm以上、深さ19cmの小ピット１基を伴う。



第15図　第７号土坑出土遺物

遺物は土師器坏が出土している。１は体部外面に「十」の墨書がみられる。伴出土器や遺構の切り合いなどから平安時代前期前半の所産と考えられる。

第６表　第７号土坑出土遺物観察表

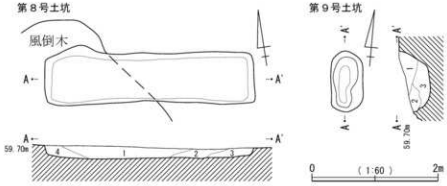
No.	器種	法量（cm）			技法	胎土	色調		焼成	備考
		口径	底径	器高			外面	内面		
1	土師器坏	11.6	8.2	3.2	外面：口縁部ヨコナデ、胴部から底部ヘラケズリ、胴部はヘラケズリ後に指頭によるナデ、内面：ヨコナデ、外面に「十」字の墨書	角閃石・白色粒・黒色粒	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	ほぼ完形

第８号土坑（第16図、図版５）

調査区の西側に位置する。

平面形は長径336cm、短径95cm、深さ20cmの隅丸長方形を呈する。長軸方向はN－80°－Wである。断面形は皿状に近く、底面はおおむね平坦である。

遺物は少量の須恵器坏・甕、土師器坏・甕が出土している。いずれも細片であり、図示するまでには至らなかった。伴出土器のあり方から平安時代の所産と考えられる。



第８号土坑説明
第１層．暗色土　　ローム粒・ロームブロック（φ0.5cm）多く含む。締やや強、粘やや弱。
第２層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ0.5cm）やや多く含む。締やや強、粘やや弱。
第３層．暗褐色土　ローム粒・ロームブロック（φ0.5cm）多く含む。締強、粘やや弱。
第４層．黒褐色土　ローム粒少量含む。締強、粘やや強。

第９号土坑説明
第１層．暗褐色土（黄色味あり）ローム粒やや多量、ロームブロック（φ1cm）少量含む。締弱、粘やや弱。
第２層．１層とローム粒少ない
第３層．黒褐色土（明るめ）ロームブロック（φ1cm主体）多く含む。締弱、粘やや強。

第16図　第８・９号土坑

第９号土坑（第16図、図版５）

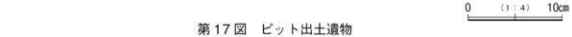
調査区の北西側に位置する。第１号溝を切る。

平面形は長径96㎝、短径50㎝、深さ48㎝の長楕円形を呈する。長軸方向はＮ－5°－Ｗである。断面形は筒状ないし鍋底状を呈し、底面は丸味をおびる。

遺物は少量の須恵器坏、土師器坏が出土している。いずれも細片であり、図示するまでには至らなかった。伴出土器や遺構の切り合いなどから平安時代前期後半以降の所産と考えられる。

４．ピット（第３・17図、第７表、図版５・７）

調査区の広い範囲から約40基のピットが検出されている。調査区の北東側と南西側にやや集中分布する傾向がみられるが、配列に明瞭な規則性は認められない。平均直径44㎝、深さ30㎝を測る。第18号ピットより土師器甕の破片、第19号ピットより縄文中期中葉土器の破片、第22号ピットより須恵器坏の破片がそれぞれ出土しているが、覆土のあり方から大半が平安時代の所産と考えられる。



第17図　ピット出土遺物

第７表　ピット出土遺物観察表

No.	器種	法量（cm）			技法	胎土	色調		焼成	備考
		口径	底径	器高			外面	内面		
1	土師器甕	(18.0)	－	＜6.1＞	外面：口縁部ヨコナデ、胴部横方向のヘラケズリ、内面：口縁部ヨコナデ、胴部ヘラナデ	角閃石・白色粒・黒色粒	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	良好	口縁部片、18号ピット
2	縄文土器深鉢	－	－	－	粗いＲＬ縄文を縦位回転施文、内面ていねいなナデ	石英・褐色粒	にぶい褐色	にぶい褐色	やや不良	胴部片、19号ピット
3	須恵器坏	－	－	－	外面、内面ともロクロ成形によるヨコナデ	チャート・白色粒・黒色粒	灰白色	黄灰色	良好	口縁～体部下半残存、22号ピット

Ⅴ　まとめ

本庄市北堀新田遺跡は上越新幹線本庄早稲田駅の北方約 500 m、東流する男堀川と女堀川の間に形成された低地帯中央の微高地上に立地する。旧石器時代から中世に至る有数の遺跡密集地帯である大久保山丘陵を南側に望む本遺跡周辺では、古墳時代前期以降、集落遺跡の増加が目立つようになる。特に後期には大規模集落を含めた遺跡数の増加はピークに達し、さらに以上の集落遺跡の増加と軌を一にするように多数の方形周溝墓群や古墳群の造営がみられるようになる。しかし、こうした遺跡の拡大傾向も、次の奈良時代を迎えると、一転、減少に転じ、平安時代には集落分布の希薄化が一層進展する。

今回、調査が実施された地点は北堀新田遺跡の南端に位置しており、本地点のすぐ南側には前方後方形周溝墓を含む古墳時代前期の方形周溝墓群や古墳時代中期～奈良時代の集落跡が確認された北堀新田前遺跡、南西側には古墳時代前期～奈良・平安時代の集落跡が検出された久下前遺跡が分布している。さらに本地点の西側には古墳時代前期～奈良時代の集落跡である久下東遺跡や平安時代の集落跡である北堀久下塚北遺跡、古墳時代中期中葉の大型円墳である公卿塚古墳などがそれぞれ分布しており、北堀新田前、久下前、久下東の各遺跡については一体となって大規模集落を形づくっていた可能性が従来から指摘されている。

今回の調査で発掘された遺構は竪穴住居跡３軒、溝状遺構２条、土坑８基、小ピット約 40 基にのぼる。約 250 ㎡という調査面積を考慮に入れると検出された遺構数はきわめて多く、これらの中に重複分布するものが少なくないことも重要な特徴といえるが、それにもまして注目されるのは、以上の遺構はいずれも平安時代、それも平安時代前期を中心とする時期の所産であった可能性が高いということである。

平安時代前期前半・・・・・1 号住居跡、7 号土坑

平安時代前期後半・・・・・2・3 号住居跡、1 号溝、2 号土坑

平安時代前期後半以降・・・9 号土坑

平安時代・・・・・・・・・2 号溝、1・3・4・6・8 号土坑、小ピットの大部分

小時期ごとの遺構の内訳は以上に示した通りである。これらの限られた資料だけで本地点、ひいては北堀新田遺跡の全体的な内容や構成を議論することは容易ではない。しかし、平安時代の比較的まとまった集落跡がこれまでに確認されているのは、本遺跡南西の七色塚遺跡などを含めて、ごく少数例にとどまっていた事実をふまえるならば、今回の調査の意義はきわめて大きく、同じく平安時代の集落跡の一部が検出された北堀久下塚北遺跡などをも視野に入れた分析・検討作業の一日も早い具体化が望まれるところといえる。

今回、確認された住居跡はいずれもカマドが東壁側に付設されていた。住居規模の変化にもかかわらず、こうした傾向は本遺跡周辺の古墳時代以降の集落にほぼ共通するものとして存在しており、当該地域を取り巻く歴史的・自然的条件を色濃く反映していた可能性が高い。一方、溝状遺構や土坑の具体的な性格については不明な部分が多く、小ピットの中にも規則的な配列をみせるものは認められなかった。

本地点からは、須恵器、土師器、灰釉陶器、磨石、刀子と思われる鉄製品など、平安時代前期を中

心とした遺物が出土している。調査地点の広い範囲にわたって攪乱が激しく、全掘された遺構自体も少ないことから、遺物の出土量は決して多いとはいえないが、1・2号住居跡や7号土坑で確認された「上」や「中」、「十」の銘が施された墨書土器の存在も、本遺跡を舞台にした平安時代集落の歴史的性格を考えるための貴重な資料といえる。

この他、わずか1点ではあるが、19号ピットより縄文時代中期中葉土器の細片が出土している。

＜引用・参考文献＞

早稲田大学本庄校地文化財調査室（1980～2001）『大久保山』Ⅰ～Ⅸ

太田博之　（1991）『本庄遺跡群発掘調査報告書Ⅴ―公卿塚古墳』本庄市埋蔵文化財調査報告書第19集

松本　完・町田奈緒子　（2002）『久下前遺跡第3地点発掘調査報告書』本庄市埋蔵文化財調査報告書第25集

恋河内昭彦・松本　完　（2008）『七色塚遺跡Ⅱ―Ｂ１地点・北堀新田前遺跡―Ａ１地点』本庄市埋蔵文化財調査報告書第7集

松本　完・亀田直美ほか（2009）『浅見山Ⅰ遺跡（Ⅲ次）・久下東遺跡（Ⅲ次）Ａ１・Ｂ１地点・北堀久下塚北遺跡』本庄市埋蔵文化財調査報告書第13集

石丸敦史　（2009）『薬師元屋舗遺跡Ⅱ―第2地点第2次調査』本庄市埋蔵文化財調査報告書第17集

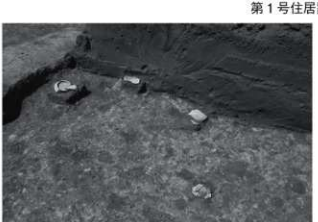
写　真

調査区全景（西より）

調査区全景（南西より）

図版２

第１号住居跡（西より）



第１号住居跡遺物出土状況（東より）

第１号住居跡カマド（西より）

第２号住居跡（西より）

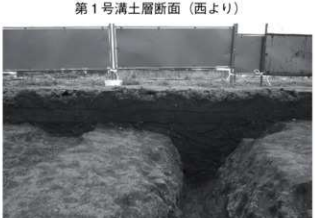
第２号住居跡カマド（西より）

第３号住居跡（南より）

第３号住居跡カマド（南より）

第１号溝土層断面（西より）

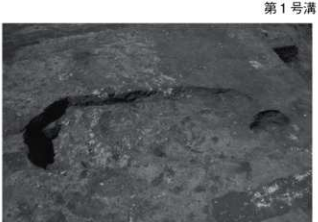
第１・２号溝（東より）



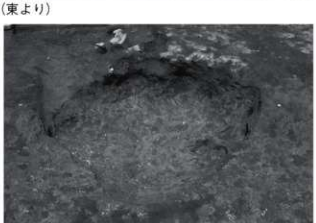
第１・２号溝土層断面（東より）

図版４

第１号溝（東より）



第１号土坑（東より）



第２号土坑（南より）

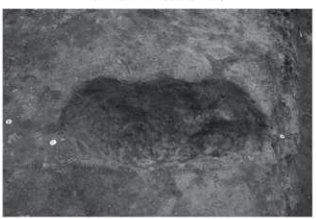
第３号土坑（北西より）

第４号土坑（西より）

第６号土坑（南東より）

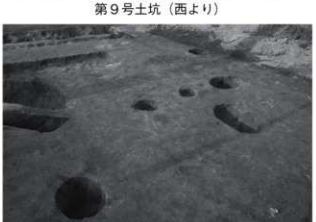
第７号土坑（北西より）

第８号土坑（南より）



第９号土坑（西より）

調査区北東部ピット群（北西より）

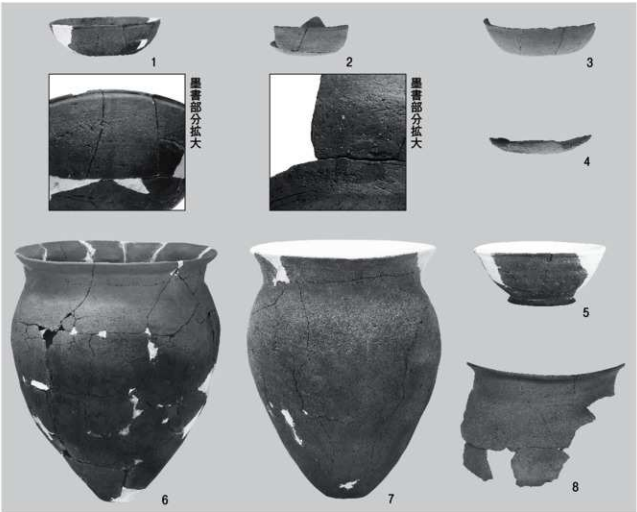


調査区南西部ピット群（南西より）

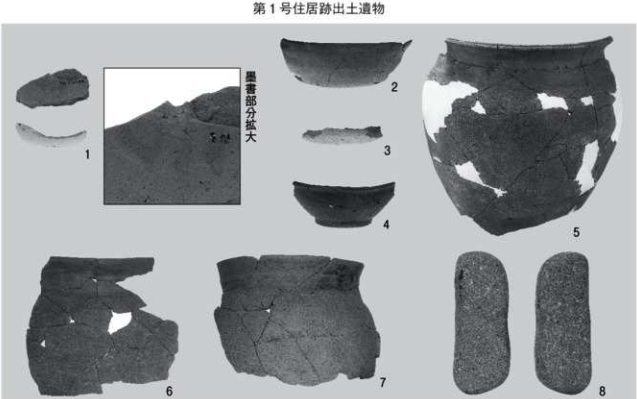
作業風景（１）

作業風景（２）

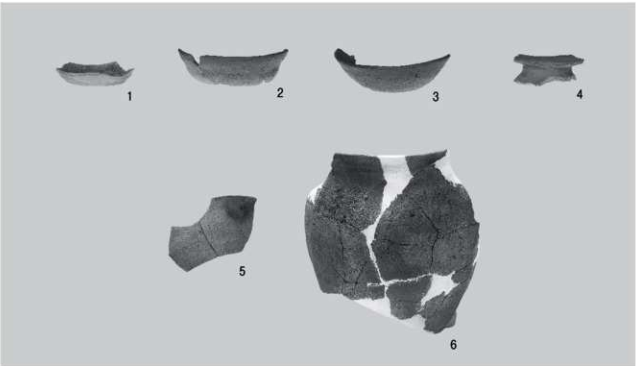
図版６



第１号住居跡出土遺物



第２号住居跡出土遺物

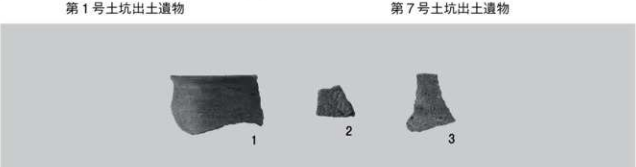


第３号住居跡出土遺物

第１号溝出土遺物

第１号土坑出土遺物

第７号土坑出土遺物



ピット出土遺物

報告書抄録

ふりがな	きたほりしんでんいせき
書名	北堀新田遺跡
副書名	集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	本庄市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第22集
編著者名	佐々木藤雄
編集機関	本庄市教育委員会
所在地	〒367-8501　埼玉県本庄市本庄3丁目5番3号　☎0495-25-1185
発行年月日	西暦2010年（平成22年）3月12日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
北堀新田遺跡（きたほりしんでんいせき）	埼玉県本庄市（さいたまけん ほんじょうし） 北堀字新田1546-1（きたほりあざしんでん）	112119	53-062	36° 13′ 19″	139° 11′ 08″	2009.4.8 ～ 2009.4.28	249.4㎡	集合住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北堀新田遺跡	集落跡	縄文時代		縄文土器	19号ピットより縄文時代中期中葉土器の破片出土。
		平安時代	住居跡3軒　溝2条　土坑8基　ピット約40基	須恵器　土師器　石製品　鉄製品　灰釉陶器	平安時代前期を中心とする集落跡。3軒の住居跡はいずれも東壁側にカマドを付設。

要約

北堀新田遺跡の南端に位置する本地点の調査では、平安時代前期を中心とする集落跡の広がりを確認することができた。調査対象地はごく狭小であるが、本遺跡周辺では当該期の集落の分布は非常に限られることから、今回の発掘調査の意義は大きい。「上」や「中」、「十」の銘が施された墨書土器の発見も、本遺跡を舞台にした平安時代集落の歴史的性格や内容を考察する上で重要な意味をもつ。

本庄市埋蔵文化財調査報告書　第 22 集

北堀新田遺跡

－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

平成 22 年 3 月 10 日　印刷

平成 22 年 3 月 12 日　発行

発行／本庄市教育委員会

〒367 - 8501　埼玉県本庄市本庄 3 丁目 5 番 3 号

電話　0495 - 25 - 1185

印刷　朝日印刷工業株式会社